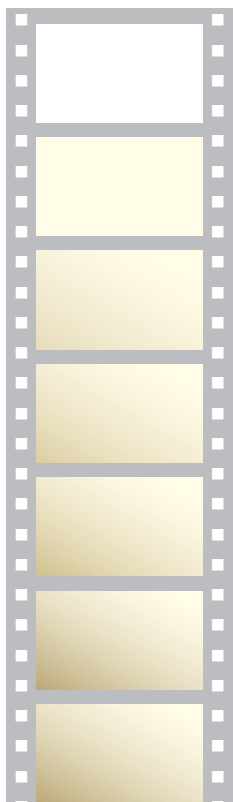


伸^{ノブ}さんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第九回 「団体鑑賞の白い特別席」

ぼくが生まれた昭和23年は、戦後のベビーブームで「ゆりかごから墓場まで」超満員の「団塊の世代」と言われました。事実、中学校時代は名古屋市に住んでいましたが、学校の1クラスは50名、それが20クラスありましたから、ひとつの学年で千人の生徒がいたことになります。

そして、勉強を競わせるかのようにテスト終了後は、成績のランキングの名前を紙に書いて職員室の廊下にはり発表したのです。ぼくも勉強は好きなほうではなく、成績はまん中を上下していましたが、点数が悪いと母からは叱られる、担任からは注意されるなど、「中学校時代は点数をいかに多く取り、いかに上位のランキングに入るか」ということしか考えていなかったような気がします。

そんなぼくでも3年間、試験にもまれて、何とか公立高校へ入ることができました。当時、愛知県内では、公立高校は男女共学、私立高校は男子校と女子校に分かれています。男女共学のなかでガールフレンドがすぐにできるかと思っ

たが、世の中、そんな甘いものではなく、専らぼくの恋人は映画雑誌でした。

そして学校での楽しみは、年一回、映画の団体鑑賞というイベントがあつたことです。小中学校でも映画の団体鑑賞はありましたが、作品はすでに決められたものでした。しかし、高校生ともなると、3本から1本を選ぶことができることになつたのです。選ばれなかつた2本の作品名は記憶にありませんが、選ばれた作品は、オーバーな表現をすれば、一生忘れられない作品になりました。それは、アカデミー賞7部門に輝く「アラビアのロレンス」です。

朝早く起きて、70ミリ映画上映の劇場「テアトル名古屋」(この劇場は、以前、母と「ベンハー」を観たことがある)の入場窓口に並びました。前から三番目だつたでしょうか？

入場が始まると走つて椅子に白いカバーがある特別席へ、しかし、「特別席へ座つていいともいけないとも」と聞いていないので心配になり、どうしようかと考えていましたが、「全席自由席です」のアナウンスが入り、朝早く並んだかいがあつたと一安心しました。

白いカバーの特別席はクッションもよく、70ミリ画面のまん中、音楽も立体音響で耳に入ってくるようにセットされていて、料金も割高になっていました。

基本的に映画を観る時、ぼくはよほどのことがない限り予備知識なしでスクリーンに相對するのですが、「アラビアのロレンス」の場合、歴史上の民族のからみがあり、それを予習して映画を観れば、より一層、理解ができたと反省しました。反省だけでなく復習もすればよかったです。一人の男の生き方を戦争のなかで描いていると理解したのです。

翌日、映画好きな先生で独身の女性、南方先生の国語の授業がありました。先生は「昨日の映画はとても感動しました。皆さんはどうでしたか?」「それでは、鈴木伸夫さん!」、急な指名で復習もしていないぼくは困ってしまい(当時のぼくは恥ずかしがりやで、人前で発言するのにも慣れてなく、「言いたいことも、その半分も言えればいい」という性格でした)、この場で何かを話さなければ、白いカバーの特別席で、また立体音響で「アラビアのロレンス」を鑑賞した立場がなくなってしまうと思うと、一瞬、上映時間・3時間半余りのフィルムが頭の中を駆け巡ったのです。そして、

ロレンスが砂漠に残ってしまった家来の一人を炎天下のなかで助けたこと。また、イギリス人ながらアラブ統一に尽力したことから「人間、何でもやればできる。人間の可能性を感じました」と、しどろもどろに話しました。大した感想でもない先生は思ったのでしよう、「アーそうですか」とだけ言い「次の人！」へ指名していききました。ぼくは鼻の先で笑われた気持ちでしたが、それ以来、いろいろな人の意見や感想を聞く時、自分の頭の中と照らし合わせて相手の感想を理解しようとインタビューに注意しています。それに、「特別席に座る時は、それなりの覚悟も必要だ」と思ったのです。

(了)

(文中敬称略)

伸

平成22年12月